

教文通信写真館

「沈黙の春 -again-」



写真とエッセイ：倉石典広さん（生物教育研究会 伊那北高校）

皆さんこんにちは。伊那北高校理科（生物）の倉石典広です。今月からしばらく、生物にまつわる私のヘンテコなコラムにお付き合いいただければ幸いです。

エッセイの続きは 7 P

「高校生のガイドが素晴らしかった。」 「若い子たちの真剣な姿に泣けてくるね。」

「高校生のガイドが素晴らしかった。」
「若い子たちの真剣な姿に泣けてくるね。」
来館者の声である。2018年の総文祭から始まった松高ボラ部の展示ガイドに私たち記念館もどれほど励まされ、力をいただいていたことか。展示ガイドの他にも語り部講話への参加、慰霊祭をはじめとするイベントへの参加とお手伝い、体験者の証言映像の書き起こし、寒い中で年末大掃除にまで来てくれる。松高ボラ部は当館以外でも、東日本大震災被災地との交流事業や地元松川町での環境整備事業など活発に活動してきており、土日也多忙と聞いている。「ブラック部活」などと冗談で言っていた頃もあったが、彼らを社会に引っ張り出す先生方のパワーにもいつも敬服しており、こうした



教文通信

発行所

長野県教育文化会議

発行人

寺尾 真純

今号の記事

01-02

行動する高校生

「戦争を 満蒙で起こったことを
次世代に繋ぎともに考えるために」

松川高校ボランティア部

03-06

2024 第 4 回総研報告

ジェンダー平等の教育を考える

07

高校教育シンポジウム参加報告

教文通信写真館コラム（つづき）

08

研究会案内

「学びの場としての図書館教育」

「特別支援教育と高校教育」

満蒙開拓平和記念館と松高ボラ部の展示ガイド活動

満蒙開拓平和記念館 三沢亜紀

行動する高校生 松川高校ボランティア部

戦争を 満蒙で起こったことを

次世代に繋ぎともに考えるために

満蒙開拓平和記念館でのボランティアガイドを通じて

生徒の活動に理解をしてくださる学校や保護者の皆様にも心よりお礼を申し上げます。

記念館では展示コーナーごとに担当を決め、先輩のガイド原稿を引き継いで練習を始める。知らない言葉、読めない漢字……。はじめは戸惑いの連続であろう。記念館に通い、学び、少しずつ言葉が自分のものになっていく。引き継いだ原稿が年々バージョンアップされていくのだ。

1年生の時には重圧で泣きべそをかいていた生徒が、3年生になると堂々と来館者と会話をしながらガイドをするまでになったりする。中にはコミュニケーションが苦手な生徒もいる。人の目を見て話すことができない。大丈夫かなあと心配していたても、経験を重ねる中で自信をつけ、立派にガイドを務めるようになる。彼らが展示ガイドをする意味は、もちろん歴史の継承だが、それと同時に、社会性を身に付け、人として成長していく姿に毎年感動させられている。

満蒙開拓という歴史は複雑で難解だ。高校生たちのガイドは拙い部分もある。しかし、彼らのガイドに心を動かされる人々が大勢いる。次世代へ



の歴史の継承を體現してくれていることに希望を与えてくれる存在だ。これからも平和な社会を創る主体者として、この活動を続けていただければありがたい。願わくは、松高ボラ部の取り組みが同じ高校生に広がっていったほしい。

(みさわ あき)

学んで 考え そして繋げる 戦争は二度とあってはならない

松川高校ボランティア部3年 平井義大

私たち、松川高校ボランティア部は、2018年から阿智村にある満蒙開拓平和記念館において展示ガイドをしてきました。実際に、記念館で繰り返し練習をし、訪れたお客様にガイドをしてきました。お客様に満蒙で起きたことをより理解し得ていただくために、私たちも満蒙のことを勉強してきました。

満蒙展示ガイドを通して考えたことは、当時の政府の政策によって、数多くの日本人や現地の中国人が犠牲になったことに対して、恐ろしさを感じました。特に、満州への日本の移住に際し、一般の開拓民を北方に居住させることで、ソ連からの侵攻が起きた際に人の壁になるように配置したことは、当時の政府が人々をどう扱っていたのか知ることができ、こんな恐ろしいことは二度とあってはならないことだと強く感じました。私たちがガイドをこれまで続けてきたのは、このような惨劇を二度と繰り返さ

ないように後世

にこのことを残していくことが必要であると考

えているからです。しかし、今年

は戦争が終結してからちょうど80年の節目の年です。既に戦争を体験された

世代の方はだんだんと亡くなられ、少なくなってきたのが現状です。そんな中、私たちはこういった世代の方々の話を聞くことができる最後の世代です。私たちは、戦争体験された方の話を聞いて、そのことを家族や友達に対して伝えていくことによって、満蒙で戦争中に起こったことを次世代につないでいくことが私たちの役割として最も大切なことだと考えています。

私たちは、これからも満蒙のことについて勉強をし、ガイドをしてより理解を深めて、満蒙で起こった悲劇をたくさんの人に伝えて、それぞれの人が満蒙や戦争のことについて考え、次世代に繋げていくことができるようにがんばっていききたいです。

(ひらい よしひろ)



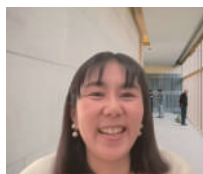
「行動する高校生」コーナーへの情報募集中！
授業・自主活動・地域との関わり・日々の地道な取組……各校の生徒の情報をお寄せください

2024 教文会議第4回総合研究会 ジェンダー平等の教育研究会全県研究会 「ジェンダー平等の教育を考える」総合研究会 報告

2025年12月7日(土) オンライン

■ 研究会開催にあたり

2020年から毎年12月に「ジェンダー平等の教育」を考える総研が連続して持たれている。今年度は明治大学情報コミュニケーション学部の中洋美准教授の講演を柱にオンラインで行った。寺尾議長「12月1日世界エイズデー、12月3日障害者の日、4日から人権週間。この間も戦争が続く、人権が蹂躪されており、常に子どもや女性が犠牲になっている。日本はジェンダーギャップ指数も低く人間が貶められる現実があり、新自由主義が進み、格差が固定され、関係性の構築が難しくなってきた。他者を尊重しない危機的な状況だが、真実を見極め、民主社会を構築することが重要。充実した会にしたい。」という挨拶のあと、中村万里菜研究会長から「高校生の時からFacebookを使い始め、現在に至るまでほぼ毎日SNSを使っている。友人との連絡を取ることや情報を得るのに有用だが、他者や自分のことをどうとらえるかという認知の部分に課題があると



ジェンダーの視点から考える デジタルテクノロジー

感じる。また若者の自己肯定感の低さにも関連があるのでは？という問題意識がある。総務省の調査によると日本人の若い世代の7割が自分の容姿にネガティブな印象を持っている。SNSに影響を受け、見た目のコンプレックスなどが過度なダイエットやメンタル面の不健康な状態に繋がっているのではないか。」という問題提起が行われた。

■ 講演「ジェンダーの視点から考えるデジタルテクノロジー」

続いて行われた田中洋美先生の講演の演題は「ジェンダーの視点から考えるデジタルテクノロジー」。田中先生はジェンダーとメディア、AI、デジタルテクノロジーについて研究をされていて、これまでは主に大学生を研究対象としてきたが、デジタルテクノロジーの利用者層の低年齢化により、研究対象を広げたいと考えていらつしたとのこと。田中先生ご自身は2007年にネット関係で「炎上」という言葉が広がったのをきっかけに、メディアを研究し始めたそう。

2010年前後からSNSなどの新たなメディア・プラットフォームが普及し、ビッグデータ、AIといった技術が注目を浴びるようになり、私たちの生活は便利になった反面、様々な社会問題も生じている。SNS関係では、2016年「保育園落ちた日本死ね」2017年「インスタ映え」「フェイクニュース」と言った言葉が話題になり、2018年には「#MeToo」という連帯できる新しい形の社会運動が生まれた。この間、SNSの利用率は2011年が14%、2016年56%、2020年73.8%と急上昇したそう、こんなに急激に技術が広まるのはあまりないこととお話に、改めて愕然とした。

SNSは必要不可欠な存在だが…

SNSは、今や多くの人にとって必要不可欠な存在になっている。SNS上でのいじめも後を絶たない。どう使ったらいいか、どう伝えたらいいか子どもにも大人にもノウハウがなく、準備ができないまま技術が広がってしまった。SNSは生活のインフラとも言えるが、そんなインフラの持ち主は海外の企業だという現状でいいのかという問いかけに考えさせられた。先日オーストラリアでは16歳以下のSNS利用を禁止する法律が制定されるなど、海外の動きも視野に入れた真剣に考える必要がありそう。

ジェンダーの視点から

続いて、ジェンダーの視点についての話題に。「性」に基づく不均衡な社会関係(権力関係)についての分析では、必ずしも女性だけに焦点を当

てるのではなく「白人、中流階級、異性愛者、健常者の男性」が「主流」とされる社会の中で、性と様々な差異（階級、人権、民族、障がい等）は交差して考えられるという視座が与えられた。その中で興味深かったのが、「人間」という概念の見直し。AI、ロボット、機械と

02 ジェンダーの視点とは？ 簡単にまとめると...

- ・「性」に基づく不均衡な社会関係（権力関係）を分析
- ・女性／男性／それ以外であることに関わる
- ・性と様々な差異（「階級」「人種」「民族」「障がい」など）は交差
- ・「人間」概念の見直し→誰が「人間」とみなされてきたのか、人間でない存在との共存



「人間」をめぐる排除／包摂は交差や抑圧、暴力を生み出してきた。だから、そうではない世界を構想してきたんだよ。

共存する社会の中でもそもそも誰が「人間」と見なされてきたのか、「人間」とは何なのかという根源的な問いが生まれてくる。英語の man（男性）、フランス語の homme（男性）という単語は「人間」も意味するが、そこには woman、femme が含まれていない。しかし歴史を紐解くと「人間」をめぐる排除／包摂は支配や抑圧、暴力を生み出してきた。そうではない世界を構想するために、ジェンダー研究が貢献しているというお話に思わず膝を打った。

ソーシャルメディアとジェンダーを考える

4つの視点

田中先生のお話ではソーシャルメディア（Social Me）とジェンダーを考える際には4つのポイントがあるそうだ。すなわち「①性差がみられる」「②功罪あり」「③ジェンダーと関連して発

生」「④メディアリテラシー？」。①については、同じようにソーシャルメディアを使っているつもりでも、女性ユーザーが多いプラットフォーム（Instagram等）では自撮りや外見に関するテーマなどで女性が被害に遭いやすいとのこと。過度なダイエットから摂食障害に繋がったり、インスタが始めた翌年から若者のうつが増えたりしたという事例もある。②については、情報にアクセスでき、手軽にコンテンツを作成・発信することで新たな繋がりがや世論が生まれ、女性やマイノリティをエンパワーメントできる反面、オンラインストーキング、セクステイニング（性的なメッセージや写真を送る行為）やセクストーション（性的脅迫）の被害や加害も後を絶たない。また③については、元々社会の中にあつたジェンダーの問題が解決されないまま、ソーシャルメディアが普及してしまっている側面があるということ。ある意味では従来の問題、例えば女性身体モノ化、ルッキズムや性役割の強化などが一部形を変えながらネット上で拡大再生産されているとも言える。④

04 人工知能（AI）とジェンダー

4つのポイント

性的偏見・差別の（再）生産

差別する主体＝人間＋機械

AIが性的害悪を助長

機械の擬人化＝ジェンダー化



*** Kanda, H., & Hu, H. M. S. (in press, forthcoming in 2025). Artificial Intelligence's Sexual Politics: Three modes and the case of Japan. In D. Nguyen, et al. (eds.) *Intelligence, Power & Society*. Routledge.

ればならないとも。ソーシャルメディアは種類や作り手、内容が多様化しており、感情に働きかけ、依存させるよう設計されている。簡単なことではないが、急激なデジタル技術の進歩で私たちの脳の働きすら変わっているともいわれる現状の中で、ソーシャルメディアと自分の関係について考え、批判的自律性、自分で判断できることの必要性を痛感した。

人工知能（AI）とジェンダー

昨今、急速に身近になりつつある人工知能（AI）の問題についても興味深いお話を聴くことができた。ここにも4つのポイント「①性的偏見・差別の（再）生産」「②差別する主体＝人間＋機械」「③AIが性的害悪を助長」「④機械の擬人化＝ジェンダー化」があるとのこと。アルゴリズムによる性差別や人種差別助長の問題も根深い。女性や有色の人々が検索機能の特定の職業から排除されていたり、女性蔑視的な考えがビッグデータに反映され、ヘイトの助長に繋がったりという事例があるそうだ。またプライバシーや肖像権の侵害、フェイクボロボの生成も大きな問題だ。そのほか、日本では機械がアンドロイドやキャラクターのように具体化されることが多く、女性性を付与されることが多いというのは確かにその通り。Chatbotやスマートアシスタントに女性の名前がつけられたり、女性として設計されたりする――言い換えると人間＝男性／ロボット＝女性という関係性――設計段階からの問題が実装されることで人々の意識にさらに強力な刷り込みが行われてしまうという

危険がある。またAIとジェンダーに関わる問題について、日本の場合は独自のメディア文化（アニメ、アイドル、女子アナ、グラビアなど）の影響があること、日本政府がAI分野では主に産業・経済、少子高齢化、医療に言及しているが、文化への関心は希薄であることも田中先生は指摘されていた。

最後にAIとジェンダーに関して、①異なる立場の人々や組織間の対話、②学校・教育の役割、③その他のアクターの役割（学卒後、様々な研修やリスキリングなどの機会提供）、④メディアやジャーナリズムの役割が重要であるという提言で締めくくられた。

講演をめぐる質疑・討論

続いて行われた質疑応答では「掃除をするのが女性というより、嫌悪感を抱かずに広く受け入れやすいのは女性をベースにしたものなのではないか？」という質問に対して、田中先生からは「ロボットのジェンダー化については、そもそも擬人化する必要がなかったり、女性にする必要がなかったりするところで女性化されている。ステレオタイプに切り込むことも必要では？ ただし、

03 ソーシャルメディア(SoMe) とジェンダー 4つのポイント

- ①性差がみられる
- ②功罪あり
- ③ジェンダーと関連して発生
- ④メディアリテラシー？→更新しなきゃ!

出典：田中洋美・高橋香苗、2021、「若者のソーシャルメディア利用とジェンダー」『情報コミュニケーション学研究』20号／田中洋美、2023、「デジタルテクノロジーとジェンダー」田中洋美・高橋香苗・高橋健爾編『デジタル社会の多様性と創造性』明治大学出版部など

設計する側、デザイナーにそもそも女性がいな
い。プログラマーはILOによると女性は5%。
工学分野にジェンダーの授業があるか？ 作る側
が社会について学ぶことでだいぶ変わってくるの
ではないかと考えている。東京科学大学修士課程
にはChatbotに付与された性別について研究して
いる人もいる。必要ないときにはジェンダーは付
与しなくていいのではと思っている。」という回
答をいただいた。また「AIロボットに女性性が付
与されやすいのは、やはり開発者に男性が多いか
らでこれもジェンダーの問題だろうなと感じた。」

という感想に対して田中先生は「開発者は実質
的にほとんど男性。ロボットは人間に仕えるもの。
誰かに仕えたり、サービスを提供したりする
というのは労働の歴史を見てもほとんど女性。狩
猟採集民族の社会では性別分業ではなくて年功序
列で、男性も女性も一緒に狩りをしていたという
研究もある。資本主義では女性がサポートする役
割を担いがち。人間が受け入れやすくするにはど
うしたらいいかという研究をしている人たちがい
る。性別役割を受け入れた形の方が受け入れやす
いという結果が出ているが、差別・偏見を助長す
るような形で何かものを作ったりすることに賛成
するののかという問題。いくら便利でも、物が売れ
ても、それでいいのか？ ジェンダー研究者も男
性がたくさんいる。どちらが差別されているとい
う問題ではない。それで嫌な気持ちになっしま
う男性や女性がいるということは、それだけその
人のジェンダーアイデンティティが強いというこ
と。それだけ性別アイデンティティが社会の中で

強いということかもしれない。Siriはもとと女
性的な声だったが、今は選べるようになってい
る。ニュートラルなものを増やすというよりはバリ
エーションを増やして対応している。すべて取っ
払ってみるのでもいいかもしれない。」とおっしゃ
った。開発者側の問題もあるが、私たちが無自覚に
無批判に受け入れてしまっているという問題もか
なり根深いことを思い知らされた。

■ 現場からの報告

田中先生の講演の後は現場からの生徒指導の具
体的な事例をお聞きした。児童ボルノに関わる問
題で、発覚まで時間がかかったことで、関わる人
間が多くなったこと、外部の協力も得ながら、し
かし、学校が中心となっ
て指導を行ったことを報
告いただいた。SNS上
でグループができたり、
匿名で相手がわからない
ままやり取りが行われて
いたりする。ノリ・雰囲気
で発信し、周囲にうけ
るからと自分でもやって
しまう。何が正しくて、
何がいけないのかわかっ
ていない。言葉が軽く、
本人は冗談のつもりで
「死ね、うざい、きもい、
ボコボコにするぞ、殺す
ぞ」というようなことを



TISF 開会式

発信したことによるトラブルがあることもお聞きした。

報告に対して「なぜ性的な画像などを送ってしまったのか？」という質問が出された。それに対して「最初からではなくやりとりをする中で、興味があるからと画像を求める。身近にいる女の子の…という方が男子の興味を抱きやすいようだ。女子の方は仲良くなりたいたい気持ちもあるからあげてしまうのでは？ ほしいという子がいるからあげてしまう。深く考えていない印象がある。」というリアルな生徒の様子が伝えられた。田中先生からは「なぜ送ってしまうのか、もらおうと思うのか。イギリスの中等教育の学校での調査ではジェンダーと関係がある。送る子の理由、送らない理由。コミュニケーションの中で無下に断ると自分の立場が悪くなる、気に入らなれない、受け入れられたい。送らないとしても無下に断るということはしていない。後でね、今度ね…という感じ。また男の子の側からすると、生身の人間の身体というよりは物としてのコレクション。身近な、知っている人の画像の方がほしいと思う。集めて、見せ合いつくする。マスキュリニティの中のマウンティング。あいつ、すげーと認められたい。仲間内のピアプレッシャーもある。日本ではそういう研究はないが、同じようなことが起きている。当事者の中でどういう形で起きているのかは明確にはわからない、複雑な状況なのではないか。」との指摘があった。

全体討論

最後に全体を通して、参加者からは「ジェンダー化された差異」を当たり前にみなしている開発者がジェンダー付与をしてしまうという点しつくりきた。ジェンダー化された差異に当たり前のように繰り返しふれることで、どんどん内面化してしまうという怖さがあると思う。「デートDV防止教育の中でジェンダー規範と戦っている気がしている。ジェンダー規範を持つ人たちが開発しているところから、やつてもやつても追いつかないのが腑に落ちた。生徒たちは何も考えずに生きていて、流されやすい。自分を持って、人権意識を持って使わせないといけない。Siriの声は女性なのはなぜ？ ぽーっと生きているとそういうことに丸め込まれてしまう。」「学校現場でやらなければならぬことはたくさんある。アイデアもいただき、元氣も出た。」という感想が出た。また「教育現場で自分を見直したり、ソーシャルメディアと自分との関係について考えたりするワークなどについてのアイデアを知りたい」という要望に対して、田中先生からは「コミュニケーションをプラットフォーム側が最近是用意している。日本語でのコミュニケーションガイドラインをみんな読んでみて、問題のあるコンテンツを投稿していないか確認するのもいいかも。TikTokのアドバイスをしたことがある。シンガポールの説明責任センターに行った際はコンテンツをチェックして、飲酒・タバコ・動物虐待・性的なものなどガイドラインに合わないものを削除する

仕事にTikTokだけで4万人が従事していた。自分が今気になっているコンテンツを持ちより、なぜ、どうして気になったのかをざつとくばらんに話すところから始めるのもいいかもしれない。またソーシャルメディアで夢・憧れに着目して、実際の生活と自分との距離を確認させることもできるかもしれない。マスメディアの時代は、有名人と普通の人の距離がもつとあったが、ソーシャルメディアの時代は距離が近い。同じようにはなれないということを知っておくのもいいかも。気づきかけになるのでは。ジェンダー規範はガチガチで社会のいろんなところにあるが、希望を捨てずにやっていくのが大切。ダメダメというのではない対話の方法があるといいのかもしれない」と具体的なアドバイスをいただいた。

時間があつという間に感じられる充実した総研であった。普段の生活の中で無自覚に見過ごしていたことに目を開かれ、一歩踏み出してみようと背中を押された気がしている。

ジェンダー平等の教育副研究会長 内山由香里

終了後、参加者から感想をお寄せいただきました。討論あればこそ、の感想もいただいています。田中洋美さんから提供いただいた、学習資料とあわせ、教文通信デジタル版39号でご紹介します。ぜひ、教文HPにアクセスいただき、会員専用ページから、デジタル版もご覧ください。

教文通信写真館 (つづき)

「沈黙の春 -again-」

春になり、伊那の田んぼには水が入りはじめました。皆さんの地域ではどうですか？

田んぼに水が入ると色々な生物が始めますよね。その中でもカエルは特に目立ちます。大きな声で鳴きますからね。カエルの声がうるさくて夜眠れない、というクレーム？を聞くことがあります、私にとっては心地よい子守唄です。

そんな私は大学時代にカエルの研究をしていました。学問としての専門分野は「分類学」です。分類学とは、その名のとおりに「様々な特徴をもとにして生物を分類する学問」です。また、分類学には「新種を見つけて記載する（新種の名前を付ける）」という一面もあります。幸い、私も三種の新種記載に携わることができました。しかし、ここ数年は研究はおろか、野外に出ることすらほとんどしていません。何とかしなくちゃなあと思っているのですが・・・。

話を戻しますが、カエルはなぜ鳴くのでしょうか。多くの場合はオスがメスを呼ぶためです。

オスの鳴き声が聞こえはじめると、隠れていたメスは姿を現し、気になる声のオスに近寄っていきます。そして近くでオスの品定めをして（しばらくオスを見つめて）、本当にそのオスが気に入ったら、オスに触ります。するとオスはメスの背中に乗って抱き着きます。これを包接と言います。

カエルは体外受精なので、子どもを作るときの行為を交尾とは言いません。包接後、水中に入って対外受精をするのが一般的なカエルの子作りの方法です。

この写真は、そんな包接中に哀れにもヒメハブに食べられてしまったハロウエルアマガエルの姿です。20 年ほど前に沖縄で撮りました。どうしたらこのような場面に会えるのでしょうか？

実は、外敵に襲われたときにもカエルは鳴き声を上げることがあります。この“悲鳴”の元を探すと、今回の写真のようなシーンに出会うことができます。皆さんもぜひ探してみてください。それにしても最近ではカエルの数が本当に減った気がします。伊那に来てから 7 年が経ちましたが、年々、田んぼから聞こえてくるアマガエルの声が小さくなっている感じがします。

昨年、上伊那支部のコラムにも書きましたが、カエルが生態系で担っている役割は我々人間にはまだ理解できていません。カエルの減少がヒトという種の衰退につながらなければ良いなあ、とあらためて思う新年度の静かな春です。

高校教育シンポジウム In 東京（全日本教職員組合・全国高校組織懇談会）
「いまこそ戦争と平和を考えよう」
子どもの権利条約が生きて輝く高校づくりを」

1月25日（土）～1月26日（日）@エデュカス東京

2日間参加しました。初日、全体会では主催者挨拶（宮下全教委委員長）、共同研究者挨拶（植田健男名古屋大学教授）、基調報告（全教教文局浪岡氏）が行われました。次期COS（学習指導要領）を巡る動き、教育施策の対抗軸として「参加と共同」の視点、子どもの権利条約をもとにした取組の必要性、教育の本質からの議論と実践を、国民的教養とは（教文会議では共通教養）の根本議論を！、高校とは何だ！、学習権の保障

兵士埼玉在住ダニー・ネフセタイ氏。冗談、ユーモア交えて様々な問いかけの中、平和を願い、教育の大切さ、重要性を語られた。ダニーさんの「夫婦げんかと戦争の共通点は何？」みなさん考える間に私、お茶のむよ。」に会場から笑いが起きました。本通信読者も答を考えてみて下さい。
2日目は第3分科会「高校生に確かな学力を保障しよう」に参加。北海道若手の報告大阪、岡山、香川報告他、参加者が積極的に討論に参加しまし

を、戦後80年を迎えて等々三氏から今後の教育課題との今後の実践へ向けての発言でした。

講演はイスラエル元

た。入試制度を巡る報告、タブレット問題、観点別評価等々。「ICTやデジタルは出来ないことが多いことを前提に考えて」ー子安潤さん（愛知教育大名誉教授）の言葉も脳裏に浮かびます。そもそも入試が必要なのかの問も。戦後の民主教育史を振り返り、誰のため、何のための教育なのか、ここが教育政策の起点となるはず、励みの場になります。大勢の方々が参加できる機会になればと思います。充実した2日間でした。

寺尾真純・教文常任委員

「高校教育シンポジウム2025」は、2026年1月24日～25日に香川県で開催されます。25年度シンポにも積極的にご参加ください！

共催 学校図書館問題研究会長野支部(しなのがくと)
長野県教育文化会議図書館教育研究会

講演会
**学びの場としての
学校図書館**
～どう使う？ どう遊ぶ？～

講師 東京学芸大学附属世田谷中学校
渡邊 裕 氏 (国語科教諭)
村上 恭子 氏 (学校司書)

日時 6月21日(土) 13:00～16:00
会場 県立長野図書館 信州・学び創造ラボ
(オンライン併用)

「図書館教育研究会と学校図書館問題研究会長野支部の共催で講演会を行います。講師は国語科の先生ですが他の教科とも連携をされているようです。国語教育研究会をはじめ、さまざまな教科の先生方の参加をお待ちしています。」

研究会案内 図書館教育研究会
「学びの場としての学校図書館」
～どう使う？ どう遊ぶ？～

研究会案内 第2回総合研究会

『特別支援教育』
と高校教育

「教文常任委員会と多様な学び・生徒理解と発達研究会のコラボです。特別支援教育について、学校現場にはまだまだ、多くのためらいや困惑、悩み、そして課題があります。今回、初の試みとして、事前に皆さんからの声をお聴きして事前に講師にお伝えし、可能な範囲で講演の中で触れていただくことにしました。特別支援に対する声をお聞かせいただき、ぜひ、研究会にもご参加ください。」

教育のつどい 2025
のお誘い

例年のスケジュールに従えば、8月のお盆明けに、教育のつどい(全国教研)が開催されます。詳細は、6月、全教が記者会見を開いて発表し明らかに。発表次第皆さんにお知らせします。今からご予定を。

教文
「

「教育実践は意図的で価値的な営みですから、教師の判断や働きかけに迷いや失敗が伴うのは当然です。むしろ、教師は目の前の子どもの姿を通して自らの迷いや失敗と真摯に向き合うことで子ども理解を深め子どもの願いにこたえる教育実践を進めていくことができるのです・・・。(河合隆平)」

特別支援教育の
悩みは尽きない

発達障がいを持つ生徒の教育的ニーズに
対応する正解が見えない。

知識として理解はしても、

個々の生徒に向けて配慮のノウハウが

6.22

松本市勤
オンライ

講演 14:00～

講師 河合隆平さん(東京都立大学)
東京都立大学人文社会学部准教授
全国障害者
全国訪問教
演題 『特別支援
青年期の発

- ◆「特別支援教育」制度化まで運動を進める取組を知り理解す(け止め)が変わる。◆「子どもの権利条約」についての真の理
- ◆先回りした配慮ではなく、発
- ことを理解したい。◆教育的二
- ひとりを受けとめることから
- ◆だが、特別支援教育を理解

報告 13:00～

- 報告① 原金二さん(障協協)
「長野県における障害者が置かれている現在」
- 報告② 太壽堂雄介さん(全障研長野支部)
「小・中・特支学校における特別支援教育の状況と課題」
- 報告③ 宮澤まどかさん(長野県教育文化会議)
「高校からの報告」

教文
会議

野県教育文化会議 多様な学び生徒理解と発達研究会

ちら→ TEL: 026-234-2216 HP: <https://kyobun-kaigi.org/> 「長野教文」で検索

育のこんなところがわからない、こんなことで困っている
題に直面していて、どう対処したらいいかわからない、などと
隆平さんにお聞きしたいことがあれば右のQRコードから
可能な範囲で、総合研究会当日にご回答いただきます

